

【めざす生徒像】

『友愛』 他人に思いやりを持ち、ともに高め合う生徒 【社会の創り手となる生徒の育成】
『礼節』 礼儀と節度を守る生徒 【他者を価値のある存在として尊重できる生徒の育成】
『協力』 力を合わせ、よい校風をつくる生徒 【多様な人々と協働できる生徒の育成】

【学校教育目標】

生徒一人一人が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り開く力を育み、社会の作り手となる生徒を育成する。

じめじめとした日が続き、梅雨が明けるのが待ち遠しいところです。気温は日に日に高くなってきています。引き続き水分補給や休養など体調管理をして、熱中症に十分気を付けながら、夏の大会に向けて取り組んでほしいと思います。

日々の子育てには「これで良いのか？」と自問自答が続きます。『子どもが失敗しないように、私がすべて面倒をみないといけない』このような思いに駆られることはありませんか。間違いというわけではありません。けれども子どものやることすべてが親の責任ではなく、すべての失敗が子どもをダメにするわけでもありません。

子育ての目標は『親からの子どもの自立』です。そして、『いかにこの社会の中で自分の力で幸せに生きることができるか』なのです。もちろん、親としては子どものことを心配するあまり、「子どもが自ら解決しなければいけない問題」に口を出してしまうことがあります。一方、教師としても、子ども達から「先生、ありがとう!」と無垢な笑顔で言われると「もっとこうしてやりたい、ああしてやりたい」という気持ちになってしまいがちです。しかし、私たち大人がいつまでも「子どもにやってあげている親や教師」のままだと、子どもが自分自身で考え、課題を解決する力が身につかなくなってしまいます。

「子育ての心得」として知られる「子育て四訓」という教えがあります。山口県の教育者である「緒方 甫」さんが提唱した教えであり、アメリカの先住民にも同じような考え方が言い伝えられているそうです。『子どもの発達段階にしたがって、親と子どもの距離を離していく』ために、親としての心構えを分かりやすい言葉で教えてくれています。

小学校低学年の子ども達は、様々な場面で大人が「手」をかける必要があります。しかしながら、これをいつまでも行っていると自立につながりません。そこで、少しずつ大人が手を離し、子どもに任せる部分を多くしていきます。中学年になるころには任せる部分がずいぶん増えてくるのですが、この時に大人は望ましい方向へと導くための「目」をかけなければなりません。これは高学年の子ども達も同様です。

中学生は青年期前期にあたります。この頃になると親子の時間よりも学校や友人と過ごす時間が更に増えます。また親子の会話が、何か必要な時にしか話さないようになっていたりします。この時期は子どもからすると『いつも見られている』ことは煩わしさを感じるのかもしれませんが、ここは『ほどよい距離感』を保ちつつ見守る時期なんだと思います。

子どもの発達は様々であり、この通りにいくわけではありません。ただ親として、そして子どもの成長に携わる大人として、大切にしたい視点だと考えています。子育ては、この4つの言葉で言い尽くせるものではありません。ただ、子育てを見直すヒントとなる言葉かもしれません。

子育て四訓

1. 乳児の時は、肌身離さず
2. 幼児の時は、肌を離して手を離さず
3. 少年の時は、手を離して目を離さず
4. 青年の時は、目を離して心を離さず

本校3年生が5月28日から30日まで修学旅行に行きました。三日目には平和記念公園において平和の誓いを行い、千羽鶴を奉納しました。生徒たちは、平和への思いを新たにすることができました。

その後、広島平和記念資料館を訪れました。この資料館は被爆に関する資料や遺品、証言などを通して世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝えていきます。生徒たちは数多くの展示品に興味深く見ていました。また、資料館内には大変多くの訪日外国人の方がおり、我々と同様に熱心に見入っていました。世界の紛争などによる平和への危機感の高まりや、昨年12月の日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞の影響があったものと思われます。世界中の方々に原爆の悲惨さを知ってもらうことで、少しでも平和につながればと思います。



平和の誓い ～ 一部のみ紹介 ～

今年で広島に原爆が投下されて80年となります。これからも私たちは戦争や平和について学び続けます。そして、一人一人が平和を守るためにできることを考え行動していくことが、真の平和への道だと信じています。戦争の悲惨さを二度と繰り返さないよう、平和への思いを強く胸に刻み、平和な社会の実現のために努力していきたいと思っています。